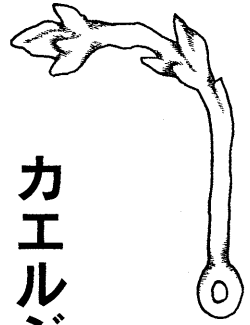


子どもの本から



## カエルジャンプでとびこえたもの

大沢啓子

「かえる」って、何か興味をひく動物だと思いませんか？ 水の中をすいすい泳ぐおたまじゃくしは子どもたちの人気者。手足がはえて大人になり、水のなかからとびだしても、平気でびよんぴよんはねまわります。空までとんでいきそうないきおいで、水も陸も空も自由に動きます。

この絵本、『かえるくんは かえるくん』の主人

公のかえるくんも自分自身のすばらしさにほれほれし、「ぼくは世界一の幸せ物」と無邪気に自分を信じてすごしていたのです。

ところがちょっとまわりをみまわしてみると、何だかすごいことのできる人がたくさんいることに気づきました。

いつも水辺で遊んでいたあのあひるが空をとん

だり、ねずみがものを作るのが上手だったり。くいしん坊でたべるだけしか能がないと思っていたこぶたは、何とお料理が得意で、おいしいケーキも作ってしまうのです。おまけに、いつものんびりそうに

◀『かえるくんは かえるくん』  
マックス・ベルジュイス文と絵 清水奈緒子訳  
セーラー出版 一九九七年



しているのうさぎが、すごい読書家だということがわかって……。

小さなかえるくんの頭は、シヨックのあまり大混乱のようです。——ぼくは世界一だったはずなのに。

かえるくんはもちろん全てに挑戦してみました。ジャンプだけではなくて、あひるくんのように空をとびたい。いろいろ考え、シートでつばさを作っておかの上から空へむかって足をけりました。でも、とべたと思ったのは一瞬で、まさかさまに川におちました。ケーキ作りも失敗。本なんかちんぷんかんとぶんで、らくがきにしかみえません。

ぼくは空もとべない、ケーキもやけない、本もよめない、……ない、……ない、……できない。何もできないただの頭の悪いみどりのかえるなんだ。かえるくんの心の中は劣等感のかたまりです。この前までは幸せの絶頂だったのに、今は不幸のどん底で

す。

自己嫌悪と憂鬱——こんな時期を誰もが経験したことがあるでしょう。この混沌とした自己嫌悪の中から自らのアイデンティティを見つけたし、かえるくんは子どもから大人へと成長していきました。

そう考えると、この本はすごい絵本です。井の中の蛙……なんてものではなくて、かえるくんの自分探しのお話だったのです。

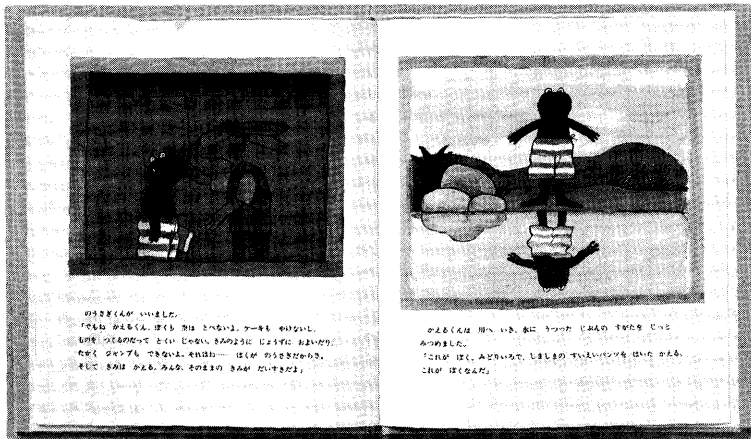
その成長の過程は、かえるくんのユーモラスで人間的な表情や行動として、画面の随所に細かく描かれています。例えば「とびたつ」ということ。

絵の中でかえるくんは、三回とびたつています。はじめは、あひるのまねをして。これはみごとに失敗。

二度目は、いろいろ考えて一週間かかってシートで翼をつくりました。この時のかえるくんの得意そうなポーズは、この本の表紙にもなっています。そ

して次のページをめくると、かえるは空へ向かってとび上がります。紙面いっぱいになり画面のわくをはずして、二ページにわたり大空をとぶかえるの姿が描かれています。でもそれはかえるくんの、とべたらすばらしいなという大きな夢なのかもしれません。そういえばとびたつ前の空き箱に立つかえるの姿はいかにも子どもっぽく、手をぐつとにぎりしめ、翼を心のよりどころとしているのがよくわかります。思春期とは、何かにしがみつかずにはいられない時期なのでしょう。

そして三度目。最後のページは本当のかえるくんの姿です。空にむかって高く高くジャンプする姿は先程のようにわくを越えてはいません。これが現実のかえるなのでしょう。ここに描かれているのは画面におさまりながらも「天にもものぼるこち」のかえる。気持ちと行動がびつたり合った等身大のかえるでした。



▲「これがぼく、みどりいろで、しましまのすいえいパンツをはいたかえる、これがぼくなんだ」

その前のページには、川の水にうつった自分の姿をじっとみつめるかえるが描かれています。はじめで本当の自分と正面から向きあうことができ、自分をみつめ、改めて自分を発見できたかえるくんの姿があります。これがあつたからこそ、最後の気持ちのよいとびたちができたのでしょうか。

ここにくるまでには、まわりの人たちのすばらしい協力と援助がありました。うさぎやねずみのやさしい言葉にはげまされたのです。「きみはかえる。みんなそのままのきみが大好きだよ」。

他人と同じようにはできない、ということばかり気にしている時はわからなかったことが、自分ほんなことがこんなにできる、という見方に気づいた時、かえるは自分のアイデンティティをたしかなものに作っていったのでしよう。

(舞々同人)